

問いの構造図に基づく授業開発の実際と 質的改善に関する研究

—— 生徒の知的性向の成長と教師の授業改善に関する問題提起 ——

星 瑞 希

〈キーワード〉 問いの構造図、授業研究、知的性向、北アメリカの地誌

1、問題の所在

本稿は問いの構造図に基づく授業を実践することで、問いの構造図を学校現場で実践する際の制約を踏まえて具体例を示し、制約のある中でいかに問いの構造図に基づく授業を実践することができるか示すことを第一の目的とする。その上で、問いの構造図に基づく授業の実際の様子を示すことで、問いの構造図に基づく授業を対象とした実践研究を今後蓄積していく際の研究課題を提示することを第二の目的とする。

本研究が依拠する問いの構造図とは渡部竜也によって提唱された社会科授業論のことを指す。問いの構造図に関する渡部の主張は、渡部竜也・井手口泰典（2020）『社会科授業づくりの理論と方法』に詳しい。渡部は全ての社会科授業が問いの構造図に基づくものになる必要はないと前置きをしながらも、問いの構造図に基づく授業は社会科の教科目標である民主主義社会の形成者を育成することに寄与すると述べる（p.7）。その理由として、問いの構造図の中心発問の「なぜ（why）」という問いは社会事象や社会構造を因果律で結びつけた構造であると子どもたちに認識させること（p.26）、問いが体系的、構造的に組織されていること（p.25）、教師の「指導された討論」によって、解明した事実が次の疑問を生み、またこれを解明すると別の疑問が生まれるという、子どもにとって無理のない連続的探求活動が短い時間でも教室で生じるような組織がなされること（pp.26-27）によって、子どもたちが複雑な社会事象を読み解くうえで必要であるが、簡単には回答を導き出すことが難しい問いの立て方や解き方などの方法を学び、習得することができることが挙げられる。つまり、問いの構造図を用いて授業を行うことで、子どもたちは科学的に質の高い社会認識を得るだけでなく、主権者として社会の問題に対し、問いを立て、背景や原因を探り、解決していく方法を身につけることが期待されている。

一方、この理論が教育現場に膾炙するためには、現場の教員が渡部の理論を土台に学校のカリキュラムや授業時間などの現場の政治力学や、生徒のニーズや発達段階などの生徒の実

態を踏まえて実践を行い、実践知を蓄積していくことが必要である。特に、渡部自身も指摘することであるが、教科書の内容を網羅的に扱わなければいけないという教師の信念は、問いの構造図に基づく授業を敬遠される大きな要因であると考えられる。そこで、本研究では内容網羅という制約があるなかで、いかに問いの構造図に基づく授業を実践することが出来るかを明らかにする。井手口（2020）は、内容網羅の制約に対し、問いの構造図に基づく授業を1時間で完結する授業とし、他の授業で網羅型の授業を行うことで、問いの構造図に基づく授業が実践可能であることを示した。井手口の実践した授業は古代と中世各々における貨幣の流通に関するものであり、時代やテーマを絞った授業であれば数時間で実践可能であり、網羅型の授業と問いの構造図に基づく授業を併用して単元を構成できることが示唆されている。しかし、1時間ではより広範で複雑な社会事象を説明することは困難である。これまで社会科教育学研究では、より広範で複雑な社会事象を説明するためには、5時間～10時間（10時間を超える場合もある）からなる単元を構成してきた。そこで、単元規模で問いの構造図に基づく授業を行う際に、いかに内容を網羅することが出来るのかを本研究では明らかにする（研究課題①）。

また、問いの構造図に基づく授業に対しては、教師の教えたい内容を生徒が無批判に受容するのではないかという疑念が呈されることが予想される。例えば、坂井（2020）は、教師の問いかけがなければ授業がはじまらないというのは思い込みにも過ぎず、実社会と地続きな子どもの素朴な「問い」こそが重要であると述べる。つまり、問いの主体を生徒ではなく教師にしてしまうことで、生徒は教師の敷いたレールの上をなぞることになり、生徒の素朴な疑問は活かされないのではないかという疑念が呈されている。そこで問いの構造図に基づく授業は、生徒が無批判に教師の設定した内容を受容することになるのかということを検証する（研究課題②）。

2、問いの構造図に基づいた中学校地理授業

(1) 授業構成の論理

本研究では、中学校社会科地理的分野の北アメリカの単元で授業開発を行う。その際に、中本（2017）が開発した授業モデル「大統領選にみるアメリカ」を参照して開発した。中本が開発した単元は「なぜ、トランプ氏は過激な発言をするのに、多くの人から支持を得ているのか」という問いの構造図に基づく授業と同様に「なぜ」の問いが中心発問に据えられている。渡部は問いの構造図に基づく授業を開発する際には、「なぜ」を問う中心発問を設定したのちに、5W1Hの「なぜ」を除くその他の疑問詞4W1H（「誰が」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」）で事実を整理することを推奨している。中本の授業モデルは4W1Hの多くが整理されているため、中本の授業プランは問いの構造図に落とし込みやすい。また、2020

年はアメリカ大統領選挙があり、日本でもトランプ氏の言動が関心を集めていたため、生徒が学ぶ意味を感じやすいのではないかと考えたため参照した。一方で、中本(2017)は問いの構造図から授業を作成していない。おそらく、中本は単元を通して生徒に身につけさせたい中心的知識(説明)を段階的に構造化、分節化した「知識の構造図」¹⁾を作成し、トランプ現象を移民や工業などのいくつかの視点から考察する単元構成となっている。渡部(2020)が指摘するように「知識の構造図」を先に設定すると生徒に教えた知識が先行してしまい、子どもの自然な思考過程を保証しない歪な展開をしてしまう危険性がある(p.149)。実際に中本の授業プランは、移民問題を扱う中で「アメリカにやってきたヒスパニックはどんな影響を与えるだろう?」という問いに対して、予想される答えは「低賃金でも働き、これまで就いていた人の仕事を奪ってしまうかもしれない」という答えが用意されているが、ニュースなどを見ている生徒からは「治安が悪化する」などの回答が出てくることは容易に想像がつく。また、詳しくは後述するが、視点が変わる際に前後の問いの繋がりが不明瞭な箇所もある。そこで、本研究では、中本の授業案を批判的に継承し、問いの構造図を作成する。

(2) 授業構成の実際

1) 年間指導計画

本研究は中学2年生社会科地理的分野北アメリカの単元を対象としたが、前単元のヨーロッパと南アメリカにおいても、「なぜ」を問う問いを中心発問とした。

本校の生徒は世界地理に馴染みがなく、学ぶ意味を感じていない生徒も一定数いる。地理が苦手なある生徒からは「公民は学んだ方がいいけど、地理は学ぶ意味がない」という声も聞かれた。そのため、世界地理に馴染みが薄い生徒や地理が苦手な生徒でも学ぶ意味を感じられるように、時事問題を踏まえた中心発問(Main Question: 以下、MQ)を各単元で設定した。例えば、ヨーロッパを扱う単元では、2020年2月にイギリスのEU離脱が欧州議会で正式に決定されたことから、「なぜ、イギリスはEUを離脱したのか?」をMQとした²⁾。南アメリカを扱う単元では、ブラジルのボルソナロ大統領がコロナを軽視する発言をし、大統領自身が感染するニュースが話題になったことから、「なぜブラジルの大統領は、コロナは少しの風邪と言うのか?」をMQに設定し、南アメリカのポストコロニアルな社会構造を分析した。

2) 問いの構造図に基づいた授業を行う上での制約—内容の網羅—

筆者は社会科教員1名(常勤、ベテラン教師)と計2名で2学年地理を担当している。筆者は教職歴2年、中学校社会科を初めて担当する新米教師である。授業の形態に関して個々の教員に裁量があるが、進度や内容を揃えるために、最低限抑えなければいけない知識がト

ピックごとに掲載されたプリント（以下では授業プリント）を用いて授業を展開することとしている。北アメリカは5枚であった（自然環境と都市、移民と国家の成立、農業、工業、大統領選挙）（表1）。中本の授業モデルでは農業が含まれていないが、学校現場で問いの構造図に基づく授業を行う場合、何かのピックを捨象することは難しい。そこで、農業で抑えなければいけないアメリカの農業の特色や適地適作を探求過程の中に盛り込むこととした。また、自然環境や都市名に関する内容は問いの構造図の中に全てを組み込むことが出来なかったため、MAに回答したのちに2時間で扱った³⁾。

表1 「授業プリント」の主な内容

テーマ	主な内容
自然環境と都市	北アメリカの気候区分、地形、都市
移民	移民の変遷、アメリカ合衆国の成立
農業	アメリカの農業の特徴、適地適作
工業	五大湖工業地帯の主な都市、原料、サンベルトの工業都市
大統領選挙	大統領の任期や役割、大統領選の仕組み、二大政党

3) 問いの構造図に基づく授業の開発

筆者は中本（2017）を適宜参照しながら、問いの構造図を作成した。MQは中本同様に「なぜ、トランプ大統領は過激な発言をするのに、多くの人々から支持を得ているのか?」とした。理由としては、ほぼ全員の生徒が授業当時のアメリカ大統領はドナルド・トランプであることを知っており、また彼が過激な発言やポリティカルコレクトネスに反するような発言が多いことを知っていた一方で、なぜ彼が大統領に選ばれたのか、なぜ多くのアメリカ国民に支持されているのかと尋ねてみると、答えられる生徒はいなかったためである。そこで、導入ではアメリカ大統領の任期や大統領選の仕組み(授業プリント⑤)などを説明したのちに、「史上最悪の討論会」と呼ばれたトランプ氏とバイデン氏の討論会の様子を生徒に見せ、なぜこの人が大統領に選ばれたのだろうかという疑問をさらに喚起する。その後にトランプ氏の発言集を生徒に見せ、どちらに投票するかを尋ねたのちにMQを提示する。中本の授業モデルではこの後に「トランプ氏はどのような人々から支持されていると思うか?」「どんな疑問が出てきますか?」と発問し、予想させた後に「今のアメリカ社会はどうなっているか?」という質問を提示し、民族、貿易、工業、宗教、国際関係と文節化したピックごとに授業が展開していく。「今のアメリカ社会はどうなっているか?」という問いはそれまでの生徒の予想とは関連が薄く、突然提示されているようにも思う生徒もいるだろう。そこで、筆者はトランプ氏の発言を生徒に整理させ、「トランプ氏はどのような問題に対して強く発言を

しているのか」という問いを補助的に用いた。そこで、トランプ氏は移民問題、産業（貿易問題）に対して過激な発言をしていることを理解し、移民問題に焦点化した「なぜ、トランプ氏はメキシコの人々に対して攻撃的なのか?」という SQ1 を設定した。

SQ1 を答えるために、ヒスパニックのアメリカ国内の立ち位置を考えることとし、「アメリカの人口構成はどのようになっているか?」という SQ1.1 を設定する。ここでは、中本の授業案を参考に、1960 年から 2050 年にかけてのアメリカの人口構成の予測に関する資料の読み取りを行う。ここでは、1960 年代には 85% だった白人が 2050 年には 50% を切り、一方でヒスパニックは 1960 年代には 3.5% であったのが、2050 年には 29% と約 3 人に 1 人になることを理解する。その上で、「なぜヒスパニックが増加しているのか?」という SQ1.2 を設定し、ヒスパニックがいつ頃から増加しているのかを資料から読み取る。ここでは、1960 年代以降急増していることを抑え、その背景に移民法の改正があることを説明する。授業時間が限られていることから、資料を読み取るのではなく、教師が出生地原則と離散家族の再結束の原則について説明を行う。また、授業プリント②にアメリカの移民の変遷をまとめる項があるため、プリントを用いて移民の変遷について整理する。その上で、「そもそも、なぜアメリカの移民となるのか?」と補助発問を行い、アメリカとメキシコの製造業の 1 時間当たりの賃金格差を資料から読み取る。ここでは、より良い賃金を求めてメキシコの人々が豊かなアメリカを目指してくるという答えが出される。そこで、もう一度「なぜ、トランプ氏はメキシコ移民に攻撃的なのか?」という問いに立ち返った上で、「ヒスパニックが増加するとどのような問題が生じるのか?」という SQ1.3 を設定する。筆者はイギリスの EU 離脱を扱った際に、同様の問題を扱っていたため資料等は提示せずに、失業の問題や治安の悪化が生徒から出てくると予想した。実際に授業ではすべてのクラスでこの 2 つの問題が生徒から出された。そこで、「SQ1.4 これらの問題は実際に生じているのか?」という問いを提示し、失業率と犯罪に関する資料を提示した。失業率は 2009 年のリーマンショックや 2020 年のコロナショック後は上昇するものの、移民の増加に比例して上昇していないことを読み取る。犯罪に関する資料は中本にはなかったため、西山（2016）を参考に追加する。西山によれば、ヒスパニックの収監率は黒人より少ないが、白人よりは多い。一方で、多くは不法移民に関する収監であり、黒人やヒスパニックの収監率が白人より多い背景には人種プロファイリングの問題がある。そこで、資料からヒスパニックの収監率を読み取り「黒人よりは少ないが、白人よりは多い」と読み取り、「なぜ、黒人やヒスパニックの人々は収監率が高いのか?」という補助の問いを提示し、人種プロファイリングという人種差別的な考えがあることを説明する。また、2020 年は Black Lives Matter (BLM) の運動が世界中に広まっていたことから、BLM も人種プロファイリングの問題が関わっていることを紹介する。これらを踏まえて、SA1.4 は「必ずしも懸念されている問題が生じているとは言えないのでは

ないか」とした。以上を踏まえてSA1をまとめると次のようになると想定される。SA1「アメリカでは1960年代からヒスパニックの移民が増えており、2050年には3人に1人になると言われている。増加の背景にはアメリカとメキシコの賃金格差がある。また、1965年に移民法が改正されたことも関係している。移民が増えることでアメリカ人の失業率の増加や治安の悪化が懸念されている。これらは明確な根拠はないが、不安に思っている人の支持を得るためにトランプ氏はメキシコの人々に攻撃的である。」

SA1を踏まえて、SQ2は「なぜ、アメリカの人々の移民に対する不安は高まっているのか?」とする。なぜ不安が高まるのかを予想させると、景気が悪いのではないかと予想が出ると考えられる。そこで、SQ2.1「アメリカの産業はどのように変化しているのか?」を設定し、フロストベルトからサンベルトへの産業構造の変化を資料3（中本と同一の資料（「工業集積地の変化～フロストベルトからサンベルトへ～」『新編地理資料』）を使用）から読み取る。中本の授業プランでは説明資料の読み取りから「かつての中西部の自動車工場を中心とした地域から先端技術産業を中心とした南部や西部のサンベルトへ工業地帯の中心は移っていった。さらに、それら工業地帯を担う自動車工業やコンピュータ電子産業は多国籍企業化してアメリカから出て世界各地に現地子会社を設立している。」という回答を導き出している。その後「貿易はどうなっているのだろうか?」という問いを設定され、アメリカの工業製品を中心とした貿易赤字の問題に触れている。このように問いを設定すると工業の問題と貿易の問題の関係性が弱くなり、歪な探求過程となってしまう。そこで、「なぜ、フロストベルトは衰退したのか?」と問うことで産業構造の変化と貿易の問題を関連づけて扱えるようにする。また、授業プリント④では五大湖工業地帯を扱う際に、メサビ鉄山やアパラチア炭田などの原料産地やピッツバーグの製鉄業やデトロイトの自動車産業といった具体的な産業と都市を扱うことになっている。そのため、これらの知識に触れるためSQ2.2「なぜ、フロストベルトは発展したのか?」という問いを設定し、授業プリント④を用いて五大湖工業地帯は重工業中心の工業地帯であることを確認した後に、「重工業が発展する条件は何か?」という発問を設定する。前単元のヨーロッパでルール工業地帯を事例に重工業が原料産地指向型工業であることを確認していたため、生徒から原料産地に近いのではないかと回答を導き出すことを狙いとしている。その上で、SQ3「なぜ、フロストベルトは衰退したのか?」を設定する。フロストベルト衰退の大きな要因は自由貿易の推進の副作用として生じた産業の空洞化の問題と海外の安価な輸入品により国内産業が価格競争に敗北していることであるとされている。そこで、フロストベルトの労働者へインタビューを行った新聞記事を用いて、フロストベルトの労働者が工場が海外に移転していること、安い海外製品が流入していることを問題視していることを確認する。また、北米自由貿易協定（NAFTA）の影響で国内の自動車産業がメキシコに移転していることをトランプ氏が問題視

していることを確認するためにトランプ氏がメキシコに工場建設を宣言したトヨタ自動車を批判したツイートの読解（和訳）を行う（資料4）。その上でSQ4「なぜ、産業の空洞化が生じるのか？（メキシコに工場が移転するのか）」という問いを設定する。その際に、既出のアメリカとメキシコの製造業の賃金格差を足場かけとして用いることとする。また、「メキシコに工場移転することにはどのようなメリットがあるのか？（なぜ、東南アジアではないのか?）」という補助発問を用いることで、NAFTAにより産業の空洞化という副作用が起きていることに触れる。前単元のヨーロッパでは、イギリスのEU離脱を扱った際にEUの単一市場政策が先進国の産業の空洞化を生じさせていることに、南アメリカの単元ではNAFTAに触れているため、「アメリカとメキシコはどのような繋がりがあるのか?」「NAFTAにはどのようなメリットがあるのか?」という補助発問を設定することとした。また、新聞記事で労働者が安い海外製品が流入していることを問題視していることから、ここで中本も用いているSQ4「アメリカの貿易はどうなっているのか?」という問いとアメリカの貿易収支を示した資料を提示し、アメリカは工業製品を中心に貿易赤字となっていることを確認した上で、「なぜ、貿易赤字となるのか?」という問いを設定する。以上の探求過程を終えた後に、サンベルトに立地する企業は多国籍化しており、世界各地に工場が立地していることを資料3から読み取る。この段階で、トランプ氏の主な発言に関する資料を再度提示し、トランプ氏が中国やメキシコに対して貿易問題を槍玉に挙げていること、「アメリカを再び偉大にする」という発言は主にアメリカの製造業の復興を主張していることを確認する。また、五大湖工業地帯がある州の多くは選挙によって結果が異なる「スイングステート」であることを補足する。地理プリント④ではロサンゼルスやサンノゼ、ヒューストンなどのサンベルトの主要な工業都市を知識として抑えることになっているので、この段階で具体的な都市について説明を行う。以上を踏まえてSA2をまとめると次のようになると想定される。SA2「フロストベルトはメサビ鉄山やアパラチア炭田への距離が近く、五大湖の水運を利用できることから重工業を中心に発展した。一方で、アメリカの労働賃金が高いことからNAFTA加盟国であるメキシコに工場が移転したり、人件費の安い中国やメキシコから輸入される安価な工業製品によって国内製品が価格競争に敗れ、貿易赤字になったりすることで、フロストベルトの重工業は苦行に立たされ、仕事への不安が高まっている。また、現在の工業の中心であるサンベルトは多国籍化し、海外に工場が立地しているため、アメリカ国内に住む人々の中には雇用への不安が高まっているものもいる。」

最後にアメリカの貿易に関連づけて、アメリカの農業に関する探究過程を設定する。前のパートで衰退するフロストベルトの工業従事者は、NAFTAや環太平洋経済連携協定（TPP）などの自由貿易協定をよく思っておらず、それらを批判するトランプ氏を支持していることに触れたが、「貿易で儲けている人々はトランプ氏をどう思っているのか?」という発問を

設定し、「アメリカにおいて貿易で利益をあげているのはどのような産業か?」という補助発問を行い、アメリカは世界最大の農業輸出国であることを踏まえて、「農業従事者はランプを指示するのか?」というSQ3を提示する。この問いに関しては、様々な解釈があると考えられるが、筆者は池上(2020)を参考に農業州であるアメリカ中央部は保守性が強く保守性の強固な基盤であること、また貿易の代替として補助金が出ているため、農業政策は大統領選では争点になりにくいという」説を用意した。そこで、地理プリント③を用いて、アメリカは世界最大の農業輸出国であり、穀物輸出が中心であることを確認する。一方で、地理プリント③では、大規模農業、機械化農業、適地適作といったアメリカの農業の特徴や適地適作の具体的な内容を抑えることになっている。そこで、探求過程からは逸脱するが、教科書を用いてアメリカの農業の特徴を確認し、アメリカの気候を確認しながら(授業プリント①)、アメリカの適地適作の具体的な内容を確認していく。その上で、「輸出の中心である穀物を栽培している地域はどこか?」という発問を設定し、アメリカ中央部であることを確認する。その上で、「これらの地域はどのような特徴があるのか?」という問いと共和党と民主党の支持基盤を現す「赤い州と青い州」に関する資料を提示し、中央部は強固な保守党基盤であり、これまでの選挙で保守党が多く勝ってきた州であることを確認する。以上を踏まえてSA3をまとめると次のようになると想定される。「SA3: アメリカの農業は大規模農業や機械化農業により効率的に農作物を生産することで、穀物を中心に世界屈指の農業輸出国である。農業従事者にとって自由貿易協定の破棄は不利益を被るが、穀物栽培が盛んなアメリカ中央部は保守党の強固な支持基盤であり、補助金をもらっている。そのため、ランプ氏は選挙によって結果の異なるスイングステートの人々にとって有利な政策を過激な発言でアピールしている。」

最後に、これまでの探求過程を踏まえてMAに生徒各自で回答する。以下が想定されるMAである。

MA：アメリカでは1960年代からヒスパニックの移民が増えており、2050年には3人に1人になると言われている。増加の背景にはアメリカとメキシコの賃金格差がある。また、1965年に移民法が改正されたことも関係している。移民が増えることでアメリカ人の失業率の増加や治安の悪化が懸念されている。これらは明確な根拠はないが、不安に思っている人の支持を得るためにトランプ氏はメキシコの人々に攻撃的である。アメリカの人々の移民への不安が高まっている背景には、アメリカの産業構造の変化がある。フロストベルトはメサビ鉄山やアパラチア炭田への距離が近く、五大湖の水運を利用できることから重工業を中心に発展し、アメリカ発展の象徴であった。一方で、アメリカの労働賃金が高いことからNAFTA加盟国であるメキシコに工場が移転したり、人件費の安い中国やメキシコから輸入される安価な工業製品によって国内製品が価格競争に敗れ、貿易赤字になったりすることで、フロストベルトの重工業は苦行に立たされ、仕事への不安が高まっている。また、現在の工業の中心であるサンベルトは多国籍化し、海外に工場が立地しているため、アメリカ国内に住む人々の中には雇用への不安が高まっているものもある。トランプ大統領はアメリカ人の雇用の不安を移民になすりつけながら、「アメリカを再び偉大にする」というスローガンのもと、衰退した工業地帯の産業や雇用を守るために自由貿易協定の廃止などを訴えているため、衰退する製造業に従事している労働者はトランプ氏を支持する。一方で、アメリカの農業は大規模農業や機械化農業により効率的に農作物を生産することで、穀物を中心に世界屈指の農業輸出国である。農業従事者にとって自由貿易協定の破棄は不利益を被るが、穀物栽培が盛んなアメリカ中央部は保守党の強固な支持基盤であり、補助金をもらっている。そのため、トランプ氏は選挙によって結果の異なるスイングステートの人々にとって有利な政策を過激な発言でアピールしている。

◎中学2年生社会科地理的分野「北アメリカ州」単元の指導計画（全11時間）⁴⁾

導入 2020年アメリカ大統領選挙と大統領選の概略…1時間

PART1 アメリカ大統領選と移民問題…2時間

PART2 アメリカ大統領選挙とアメリカの工業…3時間

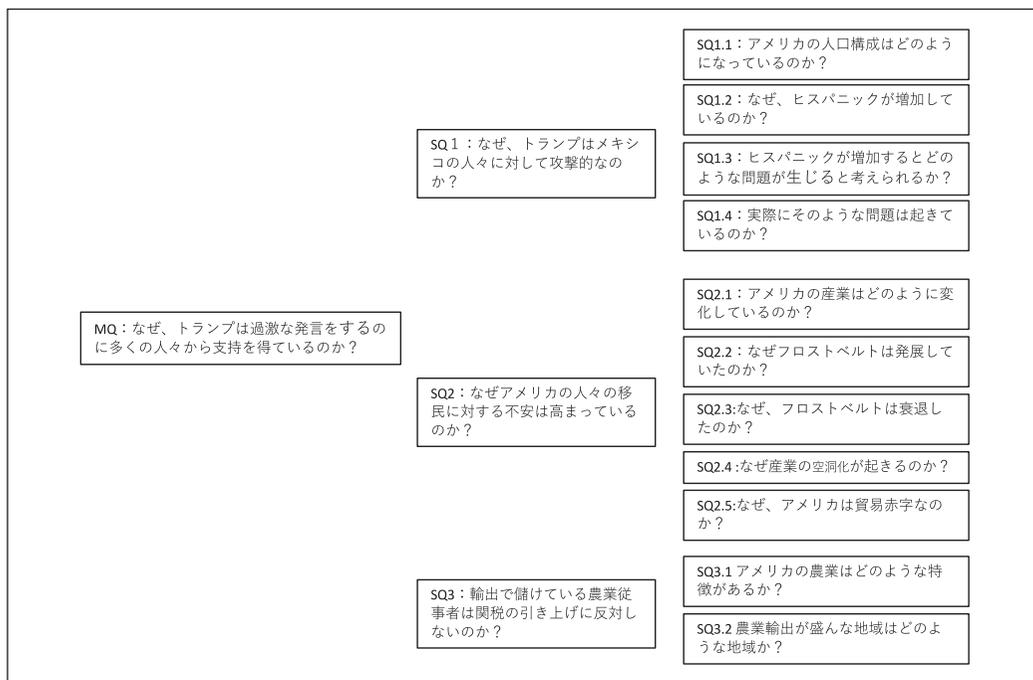
PART3 アメリカ大統領選挙とアメリカの農業…2時間

補足 アメリカの自然環境と都市…2時間

	○教師の問い（・は教師の説明） ◎：SQ ○：SQの下位の問い	生徒から引き出したい知識 (予想される反応)	資料
導入	<p>・トランプ氏とバイデン氏の討論の映像を見せる ○：現在、大統領を争っているのは誰と誰でしょうか？</p> <p>・アメリカ大統領選挙に関する概説 ○：現在の大統領はトランプ氏ですが、どのような印象がありますか？</p> <p>○：トランプ氏の発言にはどのようなものがあるのでしょうか？</p> <p>○：トランプ氏はどのような問題に対して、過激な発言をしていますか？</p> <p>MQ：なぜ、トランプ氏は過激な発言が多いのに、アメリカの多くの人々から支持を得ているのでしょうか？</p>	<p>・ドナルド・トランプ（共和党） ・ジョー・バイデン（民主党）</p> <p>(過激な発言が多い) (コロナに感染した) (コロナにマスクは不要) (ロケットマン)</p> <p>・移民問題 ・貿易問題 ・軍事問題など</p> <p>(生徒が各自で予想する)</p>	<p>授業プリント ⑤</p> <p>資料 1</p>
PART1	<p>◎：なぜ、トランプ氏はメキシコの人々に対して攻撃的なのか？</p> <p>○ヒスパニックは今アメリカの中でどのような立ち位置なのか？アメリカの人口構成の変化を見てみましょう？</p> <p>○なぜ、ヒスパニックの人々が増えているのでしょうか？</p> <p>○いつ頃から増えていますか？</p> <p>○なぜ、1960年代から増えているのか？</p> <p>・移民法が改正され、「出生地主義」や「離散家族の再結末の原則」など移民がアメリカに移住しやすくなってことを説明する。</p> <p>○そもそも、なぜメキシコの人々はアメリカの移民となるのか？</p> <p>○移民が増えることで何か問題が生じているのか？</p> <p>○本当にそのような現象は生じているのか？</p> <p>・非白人の収監率の高さの背景には人種プロファイリングという考えがあることを説明する。</p>	<p>・1960年代には85%だった白人が2050年には50%を切り、一方でヒスパニックは1960年代には3.5%であったのが、2050年には29%と約3人に1人になる</p> <p>・1960年代</p> <p>・アメリカとメキシコの間には約6倍の賃金格差があり、豊かなアメリカを目指して移民がやってくる</p> <p>・アメリカ人の失業 ・治安の悪化</p> <p>・移民は年々増加しているが、失業率に大きな変化は見られない。治安の悪化を実証する確証のあるデータはない</p>	<p>資料 2—1</p> <p>資料 2—2</p> <p>資料 2—3</p> <p>資料 2.5</p>
PART2	◎なぜ、アメリカの人々の移民に対する不安は高まっているのか？	<p>(景気が悪化しているのではないか) (アメリカの勢いがなくなっているのではないか)</p>	

	<p>○アメリカの産業構造はどのように変化しているか？</p> <p>(○なぜ、フロストベルトは衰退したのか?) ○なぜ、フロストベルトは発展したのか? ○フロストベルトの工業はどのような特徴を持っていますか？</p> <p>○重工業はどのような地域に立地しますか？</p> <p>○なぜ、衰退したのか？</p> <p>○なぜ、工場が海外に移転するのか？</p> <p>○アメリカの貿易はどうなっているか？</p> <p>○なぜ、安価な製品が輸入されるのか？</p> <p>・フロストベルトの多くの州はスイングステートであるため、この地域に住んでいる人々へのアピールは過激になることを補足する。 ・サンベルトの主要な都市と工業を補足する。また、これらの都市にある企業の多くは多国籍化し、海外に子会社があることを説明する。</p>	<p>・かつての中西部の自動車工場を中心とした地域から先端技術産業を中心とした南部や西部のサンベルトへ工業地帯の中心は移っていった。</p> <p>・ピッツバーグの製鉄業やデトロイトの自動車工業に代表されるような重工業</p> <p>・原料産地の近く</p> <p>・フロストベルトはメサジ鉄山やアパラチア炭田からの距離が近く、五大湖の水運を利用できたことで重工業が発展した</p> <p>・フロストベルトの労働者は工場の海外移転や安価な輸入品を問題視している。</p> <p>・労働力が安価な地域で作ったほうが安上がりだから</p> <p>・メキシコはNAFTA加盟国であるため、関税を安く抑えられる</p> <p>・工業製品を中心に貿易赤字となっている</p> <p>・中国など人件費の安い国で大量生産されているから</p>	<p>資料3</p> <p>授業プリント④</p> <p>授業プリント④</p> <p>新聞記事</p> <p>授業プリント④ 資料3</p>
PART3	<p>○貿易で利益をあげている人々はトランプ氏の発言に反対しないのか？</p> <p>○アメリカの貿易で利益をあげているのはどのような産業か？</p> <p>○アメリカの農業はどのような特徴があるか？</p> <p>○アメリカはどの地域で何が作られているか？</p> <p>○アメリカの気候はどのような特徴があるか？</p> <p>○貿易で利益をあげている地域はどの地域か？</p> <p>○アメリカ中央部はどのような地域か？</p>	<p>・アメリカは穀物を中心に世界最大級の貿易輸出国である</p> <p>・大規模農業、機械化農業、適地適作</p> <p>・アメリカは東西南北に熱帯から寒帯まで多様な気候がある。</p> <p>・アメリカでは地域ごとに降水量や気温にあった作物が栽培されている</p> <p>・アメリカ中央部</p> <p>・伝統的に保守党の強固な基盤である。</p>	<p>授業プリント③</p> <p>地理プリント①</p> <p>赤い州と青い州</p>
補足	<p>・アメリカの地形（ミシシッピ川の三角州、コロラド川とグランドキャニオン、デナリなど）に関する補足説明</p> <p>・アメリカの主要な都市に関する補足説明</p>		<p>授業プリント①</p>

【問いの構造図】



【授業で用いた資料】

北アメリカ
★資料①

トランプ氏の主な発言

○2016年選挙時

- ・移民なんてくそくらえ
- ・メキシコとの国境に万里の長城を造る
- ・勝って勝ちまくる。「偉大な米国の復活」を必ず成し遂げる (Make America Great Again)
- ・メキシコや日本や中国(など米国に輸出している国々)には貿易で制裁を科す。メキシコからの車輸入には35%の関税をかける。中国からの輸入は全て45%の関税だ。
- ・私はビルクリントン大統領がやった北米自由貿易協定 (NAFTA) を廃止し、いま提案されている TPP もゴミ箱に放り込むことを、皆さんに誓約する
- ・(アメリカの軍隊は) 非常に脆弱で、かつてなく装備が貧弱になり、しかも徐々に削減されつつあるので、もっと大きく、もっと有能で、もっと強力な、そして何より技術的に最先端の軍隊を創設して、誰も我々に手出しができないようにすべきだ。

○2020年10月12日 フロリダでの支持者集会にて

「自分はもう免疫がついてからならぬらしい。本当に力がみなぎっている気がする。皆さんの中に入って、全員にキスする。男たちにも、美しい女性たちにも。皆さんに盛大にキスする」



トランプ氏は選挙で負けたにもかかわらず、選挙結果に抗議する支持者と握手を交わす。 (11月1日、2017年選挙結果発表後)

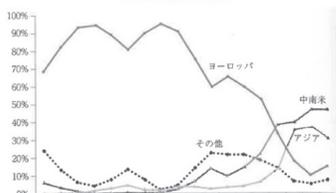
北米
★資料②

1. アメリカの人口構成の予測

	白人	ヒスパニック	黒人	アジア
1960年	85%	3.5%	11%	0.6%
2011年	63%	17.7%	12%	5%
2050年	47%	29%	13%	9%

ヒスパニック・・・メキシコ、中央アメリカからやってきたスペイン語を話す移民

2. 出身地別移民の推移



(出典) Zoltan L. Hajnal & Yochi Lin, Why Americans Don't Join the Party Race, Immigration, and the Failure of Political Parties to Engage the Electorate, Princeton University Press, 2011, p.10.

西山隆行 (2016) 『移民大国アメリカ』筑摩新書,p.51より

3. 時間あたりの資金 (製造業)

アメリカ	27.66
カナダ	25.29
メキシコ	4.75

2016年、単位は米ドル

3、授業の実際

本章では実際に授業中や休み時間などに生徒から得られた発言や質問の中からいくつかを考察することを通して、問いの構造図に基づく授業の研究課題を明らかにする。

(1) 資料の不適切さ

第一に生徒から質問を受けたのは資料の不適切さである。具体的には SQ1.4 で収監率から移民の増加は治安の悪化をもたらしているかを考察した後にある生徒 A から次のような質問を受けた。「(生徒 A) 授業で用いた資料はある一時点の資料であるが、年代ごとに収監率がどのように変化しているのか、人種ごとに分析した方が、移民の増加によって治安が悪化しているとは言いきれないということが言えるのではないか」。筆者は西山 (2016) の見解を西山が用いている資料をもとに提示することで、西山の知見を回答として用意していたが、生徒 A は西山が用いている 1 つの資料からでは授業中の回答を十分に立証できないのではないかという嫌疑を投げかけたのである。筆者はこの質問に対し、「あなたが指摘するような資料があった方がより解釈の信頼性が増すね。先生が調べている中で見つけた資料は今回の資料だけど、あなたが指摘するような資料を探してみるね。」と返答した。生徒 A の疑問は資料の不適切さを指摘しているが、適切な資料を再度探す中でこの解釈自体の妥当性を問い直す契機になると考えられる。

(2) 教師の用意した陳腐な仮説

筆者が付け加えた大統領選挙と農業政策の関係に対しては、2名の生徒から以下のような趣旨の批判を受けた。「いくら昔から保守党を支持しているからとはいえ、自由貿易協定を廃止することは自らの首を締めることであり、トランプ氏を支持しないのではないか？」この批判は確かに妥当である。実際に 2020 年の大統領選挙は農業政策が 1 つの争点であるという説もある⁵⁾。筆者は今回の大統領選挙も中央部の州はトランプ氏が勝利したことも踏まえて、池上の見解を用いたが、先の生徒の批判には正しく回答できていない。そのため、批判を行った生徒には「確かにこの見解だと説明し切れていないね。ただ、なぜトランプ氏が貿易で利益を挙げている農業従事者にとってマイナスな発言をするのかと考えたとき、この解釈しか今は知らない。でも、もっといい説明があるから今後の宿題にします」と返答した。筆者は未だにこの問いに対するより妥当な回答は導き出せていないが、実践の課題が明確となり、追加の教材研究が必要であることを認識した。

(3) 問いの精選

SQ2 は「なぜ、アメリカの人々は移民に対する不安が高まっているのか？」であったが、

SA2をまとめる際に生徒Cから以下のような趣旨の意見があった。「(生徒C) 最初の問いでは、なぜアメリカの人々という問いだったが、学習してきたことを踏まえると、不安が高まっているのは全員ではなく、製造業で働いており、製造業の売り上げの低下に不満を持つ労働者ではないか。」つまり、生徒Cは当初の問いの焦点が絞れていないことを述べている。筆者はこの質問の意義を認め、SA2をまとめる際に、「ここでいうアメリカの人々は衰退するアメリカの製造業で働く労働者であることを意識するとよい」ということをクラス全体で共有した。

(4) 考察

問いの構造図に基づく授業では上記のように、授業改善につながる質問や批判がいくつか提起された。質問をした生徒Aに「なぜ、そのようなことを質問したのか?」と尋ねると自分でもう一度資料から問いを考え直した際に、どうしても腑に落ちなかった」と言った趣旨の回答が得られた。問いの構造図に基づく授業は、教師の支援のもとに問いかけに対して資料から解釈を導き出すプロセスを生徒が学ぶ「指導された討論」(渡部2020,pp.25-26)によって展開する。渡部はこのような方法を取る理由は教師が教えたいと考えている何らかの法則や理論の伝達をより合理化・効率化するためではないと述べる。この方法を取る理由は、子どもが自分自身の理論を修正し、より間主観的なより間違いの少ない理論を得るためにどうすればよいかを子どもたちに理解させるためである(pp.56-59)。まさに生徒Aは資料を再び解釈する際に、不自然さに気づき、より間違いの少ない理論を導き出す資料が他にあるのではないかと思考したのである。また、農業従事者と大統領選の関係に関する解釈に批判を持った生徒はより間違いの少ない理論が他にあるのではないかと探求過程を通して考えていた。こうした仮説や質問の明確な叙述を求めたり、物事の理由を求めたり、別の解釈の可能性を探ったりする態度や学びの習慣は知的性向(disposition)と呼ばれる(石井,2015,pp.166-191; ニューマン,2017pp.452-453)。おそらく、教師が一方向的に教えたい理論を解説する授業より、まさに生徒Aが述べるように生徒自らが探求を行い問いと資料から解釈を行う問いの構造図に基づく授業の方が知的性向の成長が見られるのではないだろうか。

問いの構造図に基づく授業は教師が先に問いと資料の多くを選定することから、教師の教えたい内容を生徒が無批判に受容するのではないかという疑念が呈されることが予想される。一方で、生徒が知的性向を成長させ、教師の解釈に疑問や批判をぶつけ、教師がその疑問や批判の妥当性を吟味し、妥当であった場合、寛容に受け止め、授業の方向転換に活かすのであれば、必ずしも教師の認識の押し付けとはならないではないか。筆者の場合、授業開きの際に、社会科授業では自分で解釈することを大事にして理解すること、批判を大事にすること(教科書や教師の言うことも1つの解釈に過ぎないので疑ってみる)を念頭に学習し

て欲しいと述べ、授業内外での生徒からの質問や批判には出来るだけ応答するようにしている。渡部は、問いの構造図に基づく授業を通して、生徒は反対意見に耳を傾けたり、自分が誤っている場合にはそれを認めたりするなどして、「開かれた心」と「知的廉直」が育成されるべきであると森分の議論を敷衍して述べる (pp.59-60)。一方で、教師も「開かれた心」と「知的廉直」を持ち、生徒の批判や疑問に真摯に対応することで妥当性の高い解釈がより多様化し、教師の認識の押しつけにならないより開かれた討論となるのではないだろうか。また、質問が出た際に教師の教材研究の過程を示すことの意義も大きいと考えられる。生徒の質問に対し、教材研究のプロセスとその限界を示すことで、生徒はより探求過程そのものをメタ的に意識すると考えられる。このことから、問いの構造図に基づく授業は、始めに問いを設定するのは教師であるが探求過程では生徒も問いを持つため、問いを設定し、探求する主体は教師と生徒の両方であると考えられる。そのため、坂井 (2020) が問題にする教師と生徒のどちらかの問いから授業を作るかという二元論は乗り越えられることになる。一方で、なぜ生徒 A からそのような質問が出たのかをより詳細に分析し、他の生徒は同様の疑問や批判を有していたか、それらを有するにはどのような条件が必要かなどを検討する余地がある。また、筆者の作成した授業計画に不十分さがあったことが生徒からの疑問や批判を生じさせた要因である。そこで、疑問や批判を挟む余地のない授業計画の場合、生徒から疑問や批判は生じるのか、教師の教えた内容を無批判に受容するのかを明らかにする必要がある⁶⁾。

そこで、問いの構造図に基づく授業に関する実証研究を進める際の1つ目は「問いの構造図に基づく授業を行った場合、生徒の知的性向はいかに成長するのか?」である。2つ目の問いは教師の授業改善に関するものである。1点目に関連するが、生徒からの批判や疑問は教師が更なる教材研究を行い、授業改善する動機となる。筆者も生徒からの質問や批判を受けて、目下授業案を改善している。渡部の問いの構造図に基づく授業も大学生を相手に実践する中で、大学生から批判を受けたり、歪な構造となっており大学生がうまく答えられなかったりした場合には修正を加え、漸次改善され、現在の授業プランに至っている⁷⁾。そこで導き出される2つ目の問いは、「実践を通して、問いの構造図に基づく授業がいかに改善され、質的向上がなされるか?」である。この問いを明らかにすることで、教師自身が問いの構造図に基づく授業を開発、実践していく中でいかに実践知を身につけ、成長していくのかを明らかにすることができると思われる。

4、おわりに

以上、問いの構造図に基づく授業を実際に開発、実践することで、問いの構造図に基づく授業を現場で実践し、改善していく際の研究課題について考察してきた。渡部も指摘するところだが、内容を網羅しなければいけないので問いの構造図に基づく授業は無理であるとい

う考えもある。しかし、筆者が実践したように内容をある程度網羅しながら問いの構造図に基づいた授業を行うことは可能である。ただし、問いの構造図に含むことができず付加的となってしまう部分があったり、探究過程をやや歪んだものにしてしまったりしてしまうことがあった。また、問いの構造図に基づく探究過程に、直接関係しない知識を挿入することで生徒の集中力を低下させている可能性も否定できない。しかし、網羅しなければいけない内容や授業時間などの制約によって渡部が指摘する問いの構造図に基づく授業を完全に再現することは難しいが、問いの構造図に基づく授業を行うことは不可能ではない。筆者のように実践者が問いの構造図に基づく授業を作成し、実践するプロセスを開示し、知見を蓄積していくことで、この理論がより現場で無理なく実践できるものへと変わっていくことが望まれる。

また、生徒の疑問や質問が、より歪みのない探求になり授業の質を向上する契機となる可能性があることが示された。教師は1回目の実践から完璧な実践を行うことは難しく、漸次的に授業開発と改善を行なっていくしかない。そのため、多くの教師は研究授業や授業研究を行い、他の教師や教育学研究者などから批判を受けることで授業の質的向上を行なっている。一方で、問いの構造図に基づく授業は生徒から質問や批判を受けながら授業が進行することで、日々の実践から改善の示唆が明示的かつ多重に得られる実践であると考えられる。つまり、教師は授業を受けた生徒からの質問や批判に答えるために、さらなる教材研究を行い、繰り返し、教材研究を行うことで授業の質が向上していくと考えられる。

本研究はサンプル数が限られており、問いの構造図に基づく授業に関する研究課題を提起したに過ぎず、本研究だけでは一般的な知見を導き出すことが出来ていない。こうした問いの構造図に基づく授業の実態や質的向上のプロセスによりフォーカスされた実証研究が蓄積していくことが望まれる。

注

- 1) 知識の構造図の詳細とその批判は渡部・井手口(2020) pp.143-166を参照。
- 2) ヨーロッパを扱った単元の前半(ヨーロッパの自然環境、人種民族、農業、工業)は休校期間であったため、学年を担当する教員と共同でオンライン授業を行った。そのため、筆者が単独で開発したのは単元のうちEUに関する3時間だけである。
- 3) 単元の冒頭で扱うことも可能である。単元の冒頭で扱った場合、探究の最中で都市名が出てきた際に、場所や特徴をイメージできるというメリットがあると考えられる。一方で、筆者が単元最後に扱ったのは、単元開始が大統領選挙の2週間前であり大統領選に関する内容を先に扱うことで生徒の大統領選への関心を高めるためであった。
- 4) 新型コロナウイルス感染予防のため短縮授業が実施され、1時間40分授業であった。
- 5) 例えば、日本農業新聞2020年8月30日の記事(<https://www.agrinews.co.jp/p51759.html>)
- 6) 他の単元では、授業中には詳しく扱わなかった内容に対し、「なぜ」という問いを持ち、質問する生徒がしばしば現れた。例えば、オセアニアの単元では、オーストラリアが白豪主義から多文化主義に転換する理由を資料を用いて探求すると、なぜ、そもそも白豪主義を採用していたのか、その理由は何かと質問する生徒がいた。特に、実践を重ねるごとに社会科が苦手と自認する生徒からも質問が提起されるように

なった。このように教科書や教師の説明の行間に疑問を持つ生徒が現れたことは、問いの構造図に基づく授業が生徒の知的性向を成長（成長まではいかなくても刺激）させるのではないかという筆者の仮説を強固にした。

- 7) 渡部・井手口（2020）は渡部が毎年開講している「社会科教育法」の授業内容をベースに作られており、本書のなかで紹介されている授業案も渡部自身が「社会科教育法」で学生相手に実践しているものである。筆者もその授業を受けた1人であるが、筆者が受けた時の授業案と本書に掲載されている指導案を比べると、問いや資料に改善が見られる。

参考文献

- 池上彰（2020）『武器になる！世界の時事問題—背景がわかればニュースがわかる—』大和書房
- 石井英真（2015）『増補版：現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東進堂.
- 坂井清隆（2020）「教師が変われば子どもも変わる！問いを深める社会化授業 教師ナビゲートのポイント：何が変われば良いのか？」『社会科教育』737,pp.34-37. 明治図書
- 中本和彦（2017）「自己の社会認識を反省させる中等社会科地理教育内容開発 —成熟した主権者の育成をめざす単元「大統領選挙から見るアメリカ」を事例として—」『社会科研究』 pp.1-12.
- 西山隆行（2016）『移民大国アメリカ』ちくま新書.
- フレッド・ニューマン / 渡部竜也・堀田論訳（2017）『真正の学び / 学力 質の高い知をめぐる学校再建』春風社.
- 渡部竜也・井手口泰典（2020）『社会科授業づくりの理論と方法』明治図書.

付記

本研究は実践を行った際に、生徒から出た発言や質問から着想を得て執筆した。本研究の着想を得るきっかけをくれた生徒はもちろん、私の拙い実践を真剣に受けてくれた138名の生徒に感謝いたします。また、筆者に授業開発の大きな裁量権を与えてくださる同僚の先生方に感謝いたします。